

**鹿大の
KAGOSHIMA
UNIVERSITY チカラ**

KAGOSHIMA
UNIVERSITY

農學部

米田 健 教授(61)



表情から5年後の姿を予測できるはずだ。

地球という名の惑星は、どれくらいの数の人類を養つていけるのだろうか。

これが米田健教授の研究の出発点だ。大学院生だった70年代初めにマレーシア、80年からインドネシアのスマトラ島を年に数回訪れ、森の変化を調べてき

「森の健康診断」の発想から、枝ぶりや成長の程度などの木の表情と枯死する割合の相関関係を調べる。枯れた木が5年前にどんな表情を見せていたのかが分かれば、逆に現在の木の

熱帶林

象が歩いた後の草木は踏みしだかれ、人間が歩きやすい小径になる。ディズニー映画にもなった英國の児童文学「ジャングル・ブック」をほうふとさせ世紀が広がっていた。

東南アジアの森の中は30年前、にぎやかだった。バーキング・ディア（吠え鹿）やホエザルなど獣と鳥の声があちこちで響き、トウの足跡も見つか

の中心になるのはフタバガキ科の樹木。高いもので、JR鹿児島中央駅ビルの觀覽車「アミュララン」の直径と同じ約60mくらいにまで成長する。これが輸出用の木材として伐採されていく。 「アムン材」と言えば、聞いたことがある人も多いだろう。

97年、太平洋で起るエルニーニョ現象と同じものがインド洋でも起り、エジプトで大雨が降つた一方、スマトラ島は観測史上最大規模の異常乾燥に見舞われた。

それ以降、大きな樹木が倒れたり枯れたりする割合が一気に

の木まで枯れてしまい、森林は失われていく。だが、木々を切つて暮らしが糧にしている住民たちの存在を考えれば、やみくもに「森を守れ」と言つただけでは済まされない。

均衡とれた開発を助言



97年、太平洋で起るエルニーニョ現象と同じものがインド洋でも起こり、エジプトで大雨が降った一方、スマトラ島は観測史上最大規模の異常乾燥に見舞われた。

それ以降、大きな樹木が倒れたり枯れたりする割合が一気に高まつた。調査地域に生えていた木々の直径を測って断面積を計算し、合計する。それをグラフにすると一目瞭然。蓄積したデータから、短期調査ではつかめない変化が見えてきた。

「10年以上たった今も、異常乾燥のダメージが残っているのです」

大木は枯死しても、その跡地に光があり、森は再生する。だが、枯れる規模が大きすぎるため、森林は分断される。大木の周り

マレーシア・ネグリセングビラン州の森林保護区＝米田健教授提供

「10年以上たった今も、異常乾燥のダメージが残っているのです」

の木まで枯れてしまい、森林は失われていく。だが、木々を切つて暮らしの糧にしている住民たちの存在を考えれば、やみくもに「森を守れ」と言つただけでは済まされない。

傷んだ森が衛星写真にどのように写るかも分析する。その移り変わりを見れば、広い範囲での診察もできるという。現地の研究者やNGOと協力して残せる森は残しながら、均衡がとれる開発のあり方を助言する。

伐採後に植えた木を若いうちに切るのではなく、ある程度育ててから切る方が利益も環境へのプラス効果も大きいといふ。多様な生物を抱える熱帯雨林。

地球温暖化につながる二酸化炭素を吸収し、貯蔵する意味でも、その役割は大きい。

「その余裕がなくなつていつまへん」

教授の言葉は重い。